

おためしフリーペーパー

コ^{どく}
がえる
vol.2



2011/11/03

化身

一人、静かに、暗闇の中でただ待っていた。

周りの人々は何かに向かつて祈っている。祈っていることは分かるものの、何に祈っているのか、私にはわからなかった。周囲の声を懸命に聞きながら、懸命に真似しながら、何かわからないものに向かつて、祈るふりをしていた。

そうこうするうちに、周囲の人達が祈るのを終えて、立ち去った。私はまだ、祈る意味も、何に祈るのかもわからないまま、周囲に促されまま、祈るのをやめ、そして祈るべきものの前から立ち去った。

二

一体、彼らが何に祈っているのかを聞く。皆、口々に、異口、同音に、何かの形を説明してくれる。神の形を象つたものだとか、それは人に似ているとか。

彼らは言う、それには角が生えているとか、それには翼が生えているとか、それには三つの目があるだとか、それは人々の罪を見張るため憤怒の形相だとか、それは人々の罪を見守るため慈愛の表情だとか。皆、口々言うのだけでも、三盲目の私にはわからなかった。

こっそりと真夜中、それがあると思しき部屋に忍びこもうと考えた。一人、部屋を抜け出す。

音を立てぬようにしながら、いつもと違う壁の感触に慄きながら、見知らぬ建物の中をいつものように暗闇の中、静寂の中、手のひらから伝わる感触だけを頼りに、一度だけ、訪れたときの記憶だけを頼りに、知らぬ間取りの中を、ゆっくると、ゆっくると、彷徨っていく。音を立てぬように、静かなまま、見えぬものを見ようとせず、真っ暗なまま、間違えたところへ行かぬように、導かれるままに、一つ、扉を開けた。

それが部屋のどこにあるのか、わからぬまま、音を立てぬように、静かに、暗闇の中を進む。少しづつ、少しづつ、ゆっくりと、真っ直ぐと進む。まるで導かれるかのように、それを私は手の先で触れていた。私の指先に、冷たい何が五当たる。私はそれを、それだと確信し、自分の手のひら中にそれを包み込み。丹念に、舐めるように、右手で、左手で、手のひらで、指先で、それを触っていくのだけでも、いくら思案して

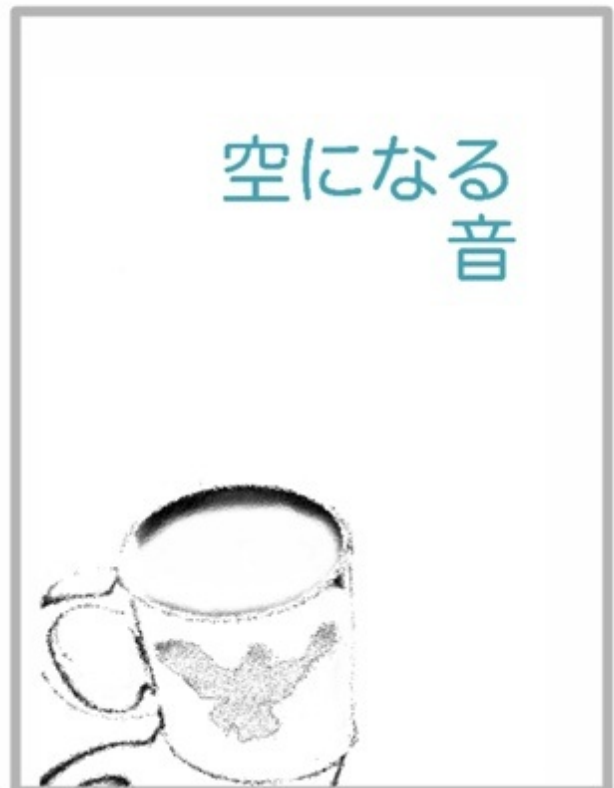
も、それが何なのか、わからない。ただ、時間だけが過ぎていき、仕方なく、そつと、それを台に置こうとした。

少しだけ、呆気無さと後悔の念で、少しだけ強く、それを台に置き直そうとしたとき、カウ、カウ、と音がした。私はその音を聞いて、ようやくわかった。それが何なのか。



既刊

歪んだ人間観察
動物への変身譚
な連作短編集



新刊

その音は神示か？
その音は雑音か？
な連作短編集

制作：独蛙 ア-10

<http://deform.y7.net/lonelyfrog/>